通信第二十八号　　他力回向の南無阿弥陀仏

　私は幼い時から散歩が好きでした。裏山の小高い所にある大きなため池には毎日のように出かけていました。四季に応じて山や木々、湖面にる景色が日々変わりました。夜に行くこともありました。寒い風の強い日でした。お月さまがさざ波にくちゃくちゃにっているのを見て、「ああ、自分と同じだな」と感じさせられたことは忘れません。

　なぜそこへかれていったのか。そこへいくと雲の割れ目から光がさっと漏れてくるようなはたらきに遇い、言葉が現れて来たからです。メモ帳をもっていくと不思議なことにそのおはたらきとは出遇えませんでした。

　六月二十二日に母が亡くなり、五日後の二十七日叔母が、七月十日に伯父が亡くなりました。その間に法要の講師の仕事や新しいの仕事もありとあわただしい日が続きました。一息ついて月忌参りの帰路、何気なく前の木々やまっすぐな道を見ていたら突如として「すべて廻向の中に在り」という言葉が出て来ました。普通にとはこちらからこうへさしむけるというはたらきをいうのですが親鸞さまはこちらからの自我のはたらきを自力といわれ、如より来生せる智慧と慈悲と方便のおはたらきを他力のご廻向と教えて下さいました。曇鸞大師は南無不可思議光如来、天親菩薩は帰命尽十方無碍光如来とおおせられたのです。

　他力のご廻向の光のおはたらきにすべてが生かされている。石や山川、草木、虫、鳥、魚等々そして人間、一人の人間の六十兆の細胞の一つひとつもご廻向、死んで新しく生まれてくるのもご廻向。風や火や水、空、等々、すべて大宇宙の一大不可思議のご廻向の中に在り。私は不思議にも不思議にも人間としてのいのちを頂いている。石であっても虫であっても魚であっても草木であっても文句の言えない命であった。この事実に心の底から感謝することもなくむしろ不満ばかりを言いってきたのです。悲しきかな、人間は天地に背き逆らい、我欲のために必要以上に侵略し罪を重ねていく。足ることを知りません。どこまでも迷うのが人間の性であり業であります。どんな時代でも、どのような環境にあっても、如何なる民族も、如何なる職業であろうと煩悩のために迷う性をもっているのが人類のすがたであります。だからこそ、法、如来の本願は大悲と智慧と方便をもっていかなる命も救い取ずにおかないのが如来の性であります。不思議にも人間にだけは懺悔と報謝（感謝）の能力が与えられています。法（本願）に遇い、聞法を続けていきますと懺悔と報謝というこころのはたらきが深まって来ます。幸福感のこころが育てられてきますから、生活や人生が明るい方向に転じられて来ます。

　七、八年前、私は兵庫県のさんの墓参りにいきました。本を通して、友君さんと法然上人との出遭いそしてお念仏の救いを教えられたからでした。友君さんは参勤交代をするために立ち寄る港で大名相手の遊女でした。罪深いことを感じていたところに、どんなものでもお念仏一つで救われるといわれる僧侶が島流しとなり、港に立ち寄るうわさを聞いて法然上人を訪ねました。「私のような罪深い者でも救われるのでしょうか」「お念仏一つで救われます、人間は誰一人罪深くない人はいません。今の仕事はできればやめなさい、ただし、やめられなくてもお念仏称えることで必ず救われます」

　友君さんは自分の意志では仕事をやめられませんでした。ただうれしくて、お念仏を称えていました。するとお客がつかなくなりました。そこで陸に上がるほかなくなりました。自分にはなんのとりえもないと思っていましたが、三味線と歌がありました。粗末な家に阿弥陀さまを安置して、ちかくの子供や若い衆に三味線と歌を教えたところ評判となり人が集まって来たのです。親たちが月謝を払うというのですが受け取りません。そこで大事にしている仏さまのお花代にしてくれるようにたのむとそれなら頂きますということになったのです。水商売のお花代の由来はここからということを聞きました。友君さんは仏さまのようなお顔になられて亡くなられたそうです。私はこの話を聞き印象に残ったので墓参りに出かけたのでした。人間の意志や努力をもってしても叶わぬことが他力回向の念仏によって、迷いの人間ままに、煩悩具足の凡夫のままでお浄土へ導き救われる事実を教えて頂いたのです。

　聖徳太子の十七条憲法の第二、く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。～～それ三宝にりまつらずは、何をもったか（曲がった在りかた）れるを（なおす）さん。

　善い悪い、損得、勝ち負け、好き嫌いとう対立の世界では心の底からの懺悔、反省ということにはならない。人間が真実に正しい方向、明るい方向に変わるのは迷いの人間世界を超えた、対立を超えた絶対界の法からの廻向のはたらきのみが曲がった在りかたをなおせる。武力や主義によって社会を変革するというのはどうやっても迷いのくり返しとなる。歴史が物語っています。余談ですが今の北朝鮮や宗教をふくめた中東地域の争いを見ればわかります。ゆえに、深く三宝に帰依してください。と十七条の憲法は私たちに呼びかけているのです。これは日本民族にとっての心の宝であります。日本人の和を尊ぶことや礼儀正しい事、優しさ、親切心などの底流に今もってはたらいている宝であります。最近の子殺しや痛ましい事件は家庭にお内仏が無くなっている事。すなわち三宝に帰すべき場所が家庭に無くなっていることが深い原因の一つだと思わずにおれません。お内仏は我欲で相手を自分の思うようにしようとする迷いから、ご廻向の法に帰らされる、無我に帰らされる大切な尊い場所であります。さらに法のこころを聞かせていただくことは最高の認知症予防であり明るく元気に生きてゆける意欲の源であることを叫ばずにおれません。

「お内仏の前に座った時だけはお念仏します」というご門徒さんが多いです。さらに一歩生活のなかで、いやお念仏の中での生活となりますとご利益は甚大であります。聞法が生活の中に生きているのかということが大事になって来ます。聞法の姿勢が問われているのです。これでは若い人は聞きたがらないだろうなという聞法者が多いです。

　　信心獲得すというは、第十八の願を心得るなり。この願をこころうるというは、**南無阿弥陀仏のすがた**を心得るなり。このゆえに、南無と帰命する一念の処に、**発願廻向のこころ**あるべし。これすなわち弥陀如来の凡夫に**廻向**しましますこころなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　お文さま五帖目五通

　今回あえて他力回向の南無阿弥陀仏という題をかかげました。そのは、比叡山にもお念仏はあったから

です。親鸞さまは常行三昧堂で堂僧をしておられた時期があります。お念仏しながら堂のまわりを回り歩く

行をしておられたのです。それは人間の自力の行の中でのことですから、荒行の出来ない人のために下の段

階の修行としての念仏ですから、お念仏を軽く見下していました。大きな声を出すのか、小さい声か。たく

さん称えるのがよいかというような人間の比較の中でのお念仏であり、仏道の支流としての位置づけでした。さかのぼって中国仏教でもお金を貯めるように一声、一声唱え積んでいって救いにあずかるという説が流

行った時代がありました。また、禅も念仏も同じだという説もありました。そこへ善導大師が出られて

「善導独明仏正意」

と、本願念仏一つで一切の人が救われるという、仏の正覚を明らかにされたのであります。その心に

法然上人が出遇われて、比叡山を下山されたのであります。親鸞さまもそれに続かれたのであります。

現代の真宗寺院や真宗教団が当時の比叡山的在りかたになっていないか。寺離れの一因になっているのではないか。問われている気が致します。

尊い仏法が宗門の憲法とか真宗聖典の教学的世界の延長としての法という同じ言葉でも全く違っているの

に、そこが混同されているのではないかと感じさせられることがあります。廻向の法と娑婆のその国でしか通用しない法、その集団だけにしか通じない法、同じ法という言葉でも内容は天地の違いであります。

　昨年、あるお寺の法要の席で

「念仏と題目とどこがちがうのですか、新興宗教の方から同じだと聞きましたが」というご質問を受けました。

「称名」と「唱名」とはちがいます。唱は自力で唱える、大きな声やみんなで唱えるときに使います。それ

に対して称は仏の心にかなうとか、ほめえるときに使われる文字です。如来のおさとりがそのまま凡夫に

廻向されることになります。ですから先ほどの御文の続きに在ります教えが実現されるのです。

　　これを『大経』には「の衆生をして功徳を成就したまえり」ととけり。されば無始以来つくりとつくる悪業煩悩を、残るところも無く、願力不思議をもって消滅するいいわれあるがゆえに、正定成就不退のくらいに住すとなり。これによりて、煩悩を断ぜずして涅槃を得といえるは、このこころなり。

　もろもろの衆生に浄土の功徳を成就させる。そこで、はるか遠い昔より造ってきたすべての悪業や煩悩を

残すところなく不思議なる願力のはたらき（廻向）によって消して下さるおに預かり、自力の修行の結

果としての救いではなく、凡夫のままに正定聚不退（迷いに退転することなく、浄土から来たの法

蔵菩薩の歩みは退くことが無い）の位につくことができる。したがって、自らの力で煩悩を断じることなく

涅槃のさとりを得ることが出来る。

　もろもろのわだかまりが消されるのです。こころが白紙にされますから一日一日が新鮮になり、みずみず

しく、若々しく、明るくならされるのです。目先の事を新しくして新鮮に成ることではありません。

さて、お文様の最初の方に「南無阿弥陀仏のすがた」とあります、これはどういうことか。ずい分長い間私の問いでありました。この場をご縁に意訳させて頂きます。

なく、言葉もおよばない覚りの世界を、すがた形に執着し悩み苦しむ人間、さらに言葉によって迷いを深める人間に六字の言葉というすがた形となって、無限の光、無限のに帰依せよ。阿弥陀の法をたのめと如から、慈悲と智慧が不思議にはたらいて、廻向されて、南無阿弥陀仏とれて、見える形、聞こえる声となって私にれて私と一体となってくださり、「仏凡一体」。川の水が海の大海の水に吸い込まれ海の水と一体にならされた時、私、私という自我の私を消して煩悩具足のままに無限界と溶け合い、大安心と大満足を与えたい。無量寿に通じた第二の誕生の姿を遂げさせたいという切なる願いが顕れた尊い姿。すなわち他力回向の「南無阿弥陀仏のすがた」と頂かせていただきます。南無阿弥陀仏を称えることの無かった人生、自分しか拠りどころにならないと、かたくなに思っていた人生に南無阿弥陀仏を称える。阿弥陀仏に帰依する人生が開かれるのです。

南無阿弥陀仏の廻向の

　　　恩徳広大不思議にて

　　　往相廻向の利益には

　　　還相廻向に廻入せり

無始流転の苦をすてて

　　　無上涅槃をすること

　　　如来二種の廻向の

　　　恩徳まことに謝しがたし

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃

如来大悲廻向のご恩のこころがずっと流れています。親鸞さまをして突き動かされ、生かしめておられる如

来の願いであります。釋尊、七高僧さま方の一貫されたお流れであります。『正信偈』のお流れであります。

ご門徒方が朝夕にお勤めしてきた伝統の流れであります。令和の今もこのお流れの中に加えられているので

あります。本願のともし火が伝わって来ているのです。

　七月二十三日、二十四日とご本山の同朋会館のご縁を頂きました。能登教区の養泉寺（藤原彰玄住職）奉

仕団との有難いご縁でありました。全国的にお念仏の声が聞こえなくなっていることを改めて聞かせて頂き

ました。黙念（仏）という言葉を初めて聞きました。だれが言い出したのか知りませんが、信心を大事にし

ない人達によって増幅したのではないでしょうか。あまりにも念仏の声が大きかったり、沢山のお念仏の声

に儀式がやりにくかったのかも知れません。しかし、お念仏の声が無いということは他力回向の信心がない

ことですから、浄土真宗の魂が無いことになります。寺が衰退するのは必然でありましょう。人口減という

よりも、さらに根深い問題があるのではないでしょうか。

続いて二十五日、大坂堺の西川和榮先生宅のご法座でした、二十名を超える参加者で活気にあふれていました。二十四日の夜五名の方が外で食事によばれました。帰りの電車で私は西川先生の横に座らせて頂き雑談をしていました。その中で、「私が印象に残ったこととして金子大榮先生が『歎異抄』には唯円さまの涙がある、どこかなと思っていたら、泣く泣くふでをそめてこれをしるす。とありました。異なりを嘆く、悲歎ということですかね。」と申し上げたら、「ようこそようこそ、深い尊い法をお教えいただいたということがあります。」悲喜の涙ということがある、私は自分を肯定し深い無意識のところで正義感、理想主義のところに立って寺や教団を見てないかと照らされました。ああ、大坂に来たがあったと思わされました。

二十八日の聞光道では、還相廻向の法蔵菩薩が五念門（礼拝、讃嘆、作願、観察、廻向）のご修行をして下さっておられることを知らされました。

ご廻向の救いが法座だけでなく、法事や月忌、日常生活の中で成就して下さることを感じさせられます。これを善導大師は「感成」感じと成る。感じさせる。と仰せになっていることを西川先生から教えていただきました。この頃は勤行のご縁で親鸞様のご和讃から直に如来様のおこころを感じさせられます。時間がかかることの有難さが知らされます。

　先日、お月忌のとき「住職さんは、死ぬとき人間に生れて本当によかったといえますか」と尋ねられました。「はい、言えますよ」とおえできました。そのかたはわからないそうです。また、仏法がわからないそうです。私は母をご縁として、お念仏を頂けてないことが照らされました。あれから人生が変わって来ました。

八月九日は母の初盆会、満中陰です。「盂蘭盆経」の説では、神通力の第一人者である目連尊者が自分の神通力で餓軌道に落ちている母を救うことが出来ないで泣き叫び、あらためて釈尊に救いを求めました。そこでお経には修行者に供養するよう説かれています。しかし、私はおおげさかもしれませんが自分の心身をすべて如来にお供え（おまかせ）して法蔵菩薩様の願いに生かされていくと頂いております。私の分からない所で私と成って下さっている法蔵菩薩さまが、私の炭の業を転じて本願の火と成って燃えてゆく感じが致します。「願生の火が点く」の本を書いたときは、火が点いたつもりであったのです。実はまだ本当に火が点いてはいなかったのです。南無阿弥陀仏とたのませる他力廻向の念仏ではなかったのです。私は称えているという自己肯定の念仏だったのです。法蔵菩薩さまは誕生していなかったのです。

　大石先生の光ありの一番の歌詞です。

十方衆生と呼びう

法蔵菩薩は光りといのち

願いをめてなが（のために、私のために）ために

南無阿弥陀仏とれたもう

　真実信心の称名は

　　弥陀廻向の法なれば

　　不廻向となづけてぞ

　　自力の称念きらわるる

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃

　　令和（二〇一九）年八月二日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照